

セブン-イレブン記念財団

# みどりの風

Winter

2023

No.76

冬

特集

土は生きている

未来へつなごう

30<sup>th</sup>

ANNIVERSARY

一般財団法人  
セブン-イレブン記念財団

## 森と共存するように 人や地域と共存する

「私たちの根っこは障がい者の就労支援で、そこから活動を広げてきました。障がい者も働こうというのが現在の障がい福祉の制度設計ですが、就労には競争原理が働いて、こぼれ落ちる人も生まれます。でも『生き物の多様性』と『生き方の多様性』という特色を持つ森との共存から考

えると、誰かを弾くようなことはいちの施設にはなじまない。人間らしい働き方をのんびり考えていきたいし、そんな森の中で生まれたのが「OJICHO WOOD」です。地域の色にあった働き方を模索して仕事に繋げるスタンスは、森が近いからこそ気づけたことですね」

大阪出身の中川さんが奈良で福祉事業を始めたとき、地域では反対する人もいた。しかし、就労支援では町の福祉課、管理を任せられたご当地キャラクターグッズの販売事業では観光協会、森を通しては森林管理協会や地元企業などと着実に関係を紡いできた。今は王寺町との繋がりで、地域活動支援センターの運営も担っている。

「子ども食堂を見据えつつ小さく始めた『森のピザ屋』のように、行政や地域の人がこれから力を入れたいと考えていることの中で、いかに『福祉を地域にひらく』活動が

できるかを考えています。開設当初と比べると、差別をなくそうとする社会の流れやSDGsの追い風はありますが、本質は地味なところにはかないという意識を持たないといけないとも思います。障がいを持つ方たちが直面する問題は、流行や世の風潮で解決できるものではないので、原点は見失わないようにしたい」

ボランティアサークルから始めて約10年。森や施設で毎日を通し、薪割り、木工、パソコンなど、それぞれの得意分野を見つけた団員は毎年1〜2名が就職し、なないろを卒業している。職員の関心事も多様で、園芸、放送、哲学などのサークル活動が生まれている。

「スタッフ11人のうち私を含む3人が正規職員で、他は薬剤師やデザイナー



毎月1回、子ども食堂「森のピザ屋」を開催。アツアツのピザが子ども100円、大人300円で食べられる

ナーなどの本業のかたわら、スキルを福祉で活かしてもらっています。団長である私のトップダウンではなく、地域や福祉に貢献したいという思いを持つ方々のやりがいを重視できるように心がけています。皆が思い思いに活動できる小さな点をいろいろ作って、結果的に地域がよくなっていく——それぞれの強みを活かしながら、自発的に学び始めるといのは素敵ですよ。都会的だけれど奥ゆかしさがあるのが奈良の土地柄。地域の人たちと一緒に考えて、福祉の声を奥ゆかしく上げていく。その声がしっかり通る仕組みを作っていけたらいいなと思っています」



陽菜の森ではヤギや鳥骨鶏を飼い、野菜やきのこ作りにも精を出す

## 里山の現代的価値と福祉を融合させる

奈良県の北西部、王寺町と上牧町に広がる「陽楽の森」(約50ha)は、うち約10haが環境省の「自然共生サイト」に認定された里山林だ。それまで鬱蒼として薄暗かった森林を整備し、2014年に開放されると、自然観察会やマルシェ、薪づくりなどの舞台になった。障がい者の就労支援をおこなう「なないろサーカス団」(王寺町)も、この身近な里山を拠点に活動する団体の一つだ。

「大阪の福祉施設に勤めていたときに知的障がい者のアート活動に携わり、彼らの純粋な世界観と豊かな可能性に魅せられました。この魅力が施設の中だけに埋もれているのはもったいない、社会に発信して経済を回す仕組みを作りたい。そんな思いから、私を含む3人で14年10月にボランティアサークルを作ってアトイベントに参加し始め、15年11月にNPOを設立しました。同じ頃に、陽楽の森の所有者の1人である谷林業の谷茂則社長と知り合い、都市林業と里山の現代的な価値を模索する

そこが知りたい!

ボランティア組織の育て方

NPO 法人  
なないろサーカス団

# 障がい者の豊かな感性を町おこしの力に

障がい者の持つ豊かな可能性を、社会に繋げるにはどうすればいいのか。里山で出た間伐材と障がい者雇用、そして町おこしを繋げた新しい福祉の「かたち」とは――。



つくりたいもの、描きたいものに純粋な才能を発揮する団員たち

谷さんと、福祉を地域にひらきたい私の構想がかみ合って、王寺町に就労継続支援B型の福祉施設を作るこ  
とになったんです」と、代表理事を

### 組織を育てる3つの秘訣

- 1 競争原理から離れて、地域の色にあった働き方を考える
- 2 行政や地域がこれから力を入れたい分野で活動を模索する
- 3 スタッフのやりがい重視した環境づくり

務める中川直美さんは振り返る。就労継続支援B型は、「一般企業に雇用されることが困難で、雇用契約に基づく就労も困難」な障がい者の就労を支援し、生産活動の機会を提供する。なないろの施設は、陽楽の森から歩いて10分の閑静な住宅街の一角にあり、現在は18〜63歳の主に知的障がいのある人(定員20名)が登録している。陽楽の森の木工棟の清掃や薪割りに携わるかたわら、21年からは町内の木材で特産品をつくる「OJICHO WOOD」をスタートさせた。団員が自ら旋盤を用いて木工品やコースターなどを作り、売り上げの一部は森林保全に活かす。町おこしにも一役買っているプロジェクトだ。



フォレスター(森林総合監理士)とともに森に入り、整備もおこなう